

日進月歩するデジタル製品を、「使い勝手」ではなく、「実装された新技術」と「製品の革新性」をテーマにレビューしていくコーナー。

石井英男

## W-ZERO3 (ウィルコム)

### 国産スマートフォンは果たして成功するのか？

ウィルコムのW-ZERO3は、マイクロソフトの最新モバイル端末向けOS「Windows Mobile 5.0 for Pocket PC」(以下WM5.0)を搭載したスマートフォンだ。スマートフォンとは、汎用OSを搭載し、アプリケーションを自由に追加してカスタマイズが可能な携帯電話を意味する。PDAと携帯電話を合体させたものと思えばよいだろう。

欧米では、シンプルなストレートタイプからQWERTYキーボード搭載タイプまで、各種のスマートフォンがリリースされているが、国内でこれまでに発売されたスマートフォンは、ボーダフォンの「702NK/702NK」(ノキア製)やNTTドコモの「M1000」(モトローラ製)など、片手で数えられるほどしかない。しかも、これらは、すべて海外メーカー製であり、基本的に欧米で売られている端末を、日本の仕様に合わせてカスタマイズした製品である。

しかし、シャープが開発と製造を担当したW-ZERO3は、名実共に「国産」スマートフォンといえる。また、WM5.0を搭載したスマートフォンは、W-ZERO3が日本初となる。WM5.0は、Pocket PC 2003 SEの後継OSで、新たに「PowerPoint Mobile」や「Windows Media

Player 10 Mobile」が搭載されるなど、機能が強化されて、Windows PCとの親和性もより向上している。

#### スライド式の QWERTYキーボードを搭載

CPUとして、インテルのPXA270プロセッサ(416MHz)を採用、128MBのフラッシュメモリと64MBのSDRAMを搭載するなど、ハードウェアスペックも高い。ディスプレイには、タッチパネル付き3.7インチVGA液晶を搭載し、一般的な携帯電話の4倍の画素数を実現。QWERTY配列のスライド式キーボードを装備していることもポイントだ。キーボードをスライドさせた状態では、画面を横にして使い、快適な入力が可能だ。ただし、本体のサイズは136×70×26mm、重量は220gと、携帯電話としては大きめだ。また、IEEE 802.11b準拠の無線LAN機能を内蔵しており、無線LAN経由でのインターネットアクセスにも対応する。miniSDカードスロットとUSBポートを搭載。USB経由でPCと接続し、PIMデータの同期やW-ZERO3をモデム代わりに使って、PCからインターネットアクセスを行うこともできる。

#### WILLCOM SIM STYLEの可能性に期待

W-ZERO3は、W-SIMと呼ばれる超小型PHSモジュールを採用していることも特徴だ。ウィルコムは、PHSの無線通信部分を小型モジュール化して、家電やおもちゃなどにも通信機能を気軽に搭載できるようにする「WILLCOM コアモジュール」コンセプトを提唱している。

そのWILLCOM コアモジュールの第一弾がW-SIMだ。W-SIM対応端末は「WILLCOM SIM STYLE」と呼ばれ、W-ZERO3以外に、コンパクトな音声端末「TT」とUSB経由でPCと接続するデータ通信専用端末「DD」がリリースされている。WILLCOM SIM STYLEは、以前ジャケットフォンと呼ばれていたことからわかるように、ジャケットを着替えるように、TPOに応じてW-SIMを装着するガワを取り替えて使えることが利点だ。

従来のPDC方式の携帯電話は、通信機能を本体から切り離すことはできないため、携帯電話の数だけ回線契約が必要になる(ただし、W-CDMA携帯やGSM携帯では、SIMカードを差し替えることで、1つの回線で複数の端末を使い分けられる)。しかし、WILLCOM SIM STYLE対応端末なら、W-SIMを差し替えることで、複数の端末を1つの回線で使うことができる。たとえばビジネスタイムには高機能で、画面の大きなW-ZERO3を使い、休暇の際には、コンパクトなTTを利用するといった、使い分けが考えられる。今後は、WILLCOM SIM STYLEのさらなる広がり期待したい。

## [ Reviewer's View ]

W-ZERO3は、ザウルスシリーズなどのPDAを長らく手がけてきたシャープが、そのノウハウを活かして設計した端末であり、PDA好きな人には待望の製品といえる。しかし、PDAとしての機能を追求した結果、音声通話に使うには、サイズや重量が大きくなってしまったことは否めない。ウィルコムでは、W-ZERO3を携帯電話とPCの間に位置する第3の存在としているが、そこにどれだけのニーズがあるのが、本製品の命運を決めることになるだろう。

**W-ZERO3** は、OSとしてWindows Mobile 5.0 for Pocket PCを採用したスマートフォンだ。Officeのサブセットを搭載しており、Windowsとの親和性も高い。超小型PHSモジュール「W-SIM」(最大128kbps)に対応するほか、IEEE 802.11b準拠の無線LAN機能も搭載。ディスプレイにはタッチパネル付きの3.7インチVGA液晶を採用。スライド式キーボードを装備していることも特徴だ。USB経由でPCと接続し、PIMデータの同期やインターネットアクセスを行うこともできる。



スライド式のQWERTYキーボードを搭載。キーボードをスライドさせて引き出すことで、画面の表示方向が自動的に横画面になる。



3.7インチモバイルASV液晶を搭載。解像度はVGA(640×480ドット)で、一般的な携帯電話の4倍の情報を一度に表示できる。



背面に133万画素CMOSカメラを搭載。静止画や動画(WMV形式)の撮影が可能。なお、マクロモードは装備していない。

超小型PHSモジュール「W-SIM」。この中にPHSの通信機能が実装されており、700件分の電話帳を記録することもできる。



OSには、Windows Mobile 5.0を搭載。液晶をスタイラスでタッチすることで、操作が行える。GUIはWindowsに似ているので、PCユーザーなら直感的に操作できるだろう。



Officeのサブセットを搭載しており、Word文書やExcel文書の閲覧や編集が可能だ(PowerPoint文書は閲覧のみ対応)。



ウェブブラウザーとして、Internet Explorer Mobileを搭載。Flashにも対応する。また、Operaもウィルコムサイトから無償でダウンロードできる。

# Xビデオステーション XVGX-VX80S (ソニー)

## 8ch同時に24時間連続録画で タイムマシン感覚を実現

### 誰もが一度は夢見る 究極のHDDレコーダー

ソニーの「Xビデオステーション VGX-VX80S」は、地上アナログTV放送に対応したHDDレコーダーだ。8つのチューナーを内蔵しており、同時に8ch分の放送を録画できるのが特徴だ。巷にあふれるHDD/DVDレコーダーでもチューナーを2基搭載し、2番組同時録画が可能な製品が登場しているが、1台で8つものチューナーを搭載した民生用機器は、ほぼ唯一の存在といってよい。

一般的なHDD/DVDレコーダーは、あらかじめ予約をした番組を録画するという、旧来のビデオデッキの延長線上にある製品だが、Xビデオステーションは、放送されるすべての番組をとにかく録画して、後で見たい番組だけ見ればよいという新しい発想に基づいている。テープメディアでは、1つの媒体に同時に複数の番組を録画したり、録画と再生を同時に行うことは不可能である。Xビデオステーションの8ch同時録画は、転送速度が高速でランダムアクセスが可能なHDDだからこそ、実現しているのだ。

### 家電ではなくPCのオプション だからこそその操作性

Xビデオステーションは家庭用TVに接続して使う製品で、赤外線リモコンも付属する。しかし、初期設定や録画設定は、LAN経由で接続されたPCから行う必要があり、電子番組表(EPG)データの

取得もインターネット経由で行う。そのため、家電というよりもPCの周辺機器として捉えるべきだ。

Xビデオステーションで特徴的なのが、録画済みの番組を番組表形式で一覧表示する「タイムマシン・ビュー」だ。このタイムマシン・ビューは、その名のとおり、タイムマシンを操るかのよう番組表を時間軸に添って自由にさかのぼれる。多くの番組の中から、見たい番組を直感的に探し出すことができるので、大変便利だ。ただしタイムマシン・ビューは、Xビデオステーションを接続したTV画面上に表示させることはできず、LAN経由で接続したPC上からしか参照できない。TVと同じ部屋に無線LAN対応のノートPCを置いておけば、ノートPCを大画面リモコンとして使うことで、もっとも便利な視聴方法となる。

### 過去の番組をザッピング可能 まさにTVのタイムマシン

また、過去の番組を再生中にチャンネルの切り替え操作が行えるので、いわゆるザッピング再生が実現できる。同時間帯に放送されていた他のチャンネルの番組を次々と切り替えて見られるわけ、まさに過去に戻って番組を視聴しているかの感覚が得られる。こういった楽しみ方は、一般的なHDD/DVDレコーダーではできない芸当だ。

Xビデオステーションは、TVとのつきあい方を根本から変えてくれる製品だ。番組単位で録画するのではなく、放送さ

れている番組をすべて丸ごと録画するというはある意味で非常に贅沢だが、時間に縛られない快適さを体験してしまうともう元には戻れない。

Xビデオステーションはソニーお得意の独創的な製品だが、他のメーカーからも多チャンネル録画対応製品の登場を期待したい。たとえばMPEG-2の代わりにH.264などの最新圧縮技術を利用すれば、より多くの番組を保存できるので、さらに便利になるだろう。

### 放送を視聴する 新しいスタイルの誕生か

さまざまなコンテンツがデジタル化され、検索可能になっているが、まだ遅れている分野が放送だ。放送と通信の融合という大きな問題以前に、TVに関する情報の検索は不十分で、それが放送される前ならなおさらだ。Xビデオステーションによって、一定期間のすべての放送を蓄積できるようになったものの、そこから見たい番組を探すには現状では番組表から自分の目で探すしかない。

もう一歩踏み込んで音声やキャプション、字幕を自動的にテキスト化して検索できるようになったらどうだろう。Google newsのように、その日に放送された番組からキーワードに引っかかった場面だけをピックアップして、自分だけのための番組が作られる。

さまざまな制約の多い現在の放送では、すぐの実現は難しいだろう。しかし、テキストベースではカスタマイズされたコンテンツの需要があるなら、動画にも同様な需要は考えられる。テキスト以上に見る側の時間を拘束する映像だからこそ、カスタマイズの需要はより高いと言える。iTunes Music Storeによって、音楽CDのアルバムという枠組みが崩れ始めたように、XビデオステーションはTV番組という枠組みを壊すきっかけになるかもしれない。

## [ Reviewer's View ]

Xビデオステーションは、改めて考えるとかなり特異な製品だ。多チューナー+大容量HDDの製品を作ること自体はどのメーカーであっても技術的には簡単だろう。しかし、2011年にテレビの地上アナログ放送が停止するという前提を前にすると、一般的な家電製品というジャンルで発売することはためらわれる。家電よりもライフサイクルが短いパソコンの周辺機器という扱いだからこそ発売できたのだろう。だが、これは実は大きな変化の第一歩なのかもしれない。

VGX-XV80Sは、8つの地上アナログチューナーを搭載したHDDレコーダーだ(4チューナーのVGX-VX40Sもある)。HDD容量は500GBから2TBまで選択可能で、2TBモデルなら8chを終日録画しても、約5.7日分(標準モード時)の番組を録り貯めることができる。VGX-XV80S自体は、家庭用TVに接続して使うが、録画設定などを行うには、LAN経由で接続されるPCが必要となる。録画した番組は、PC上で確認や再生が可能であり、DLNA準拠のビデオサーバーとしても動作する。

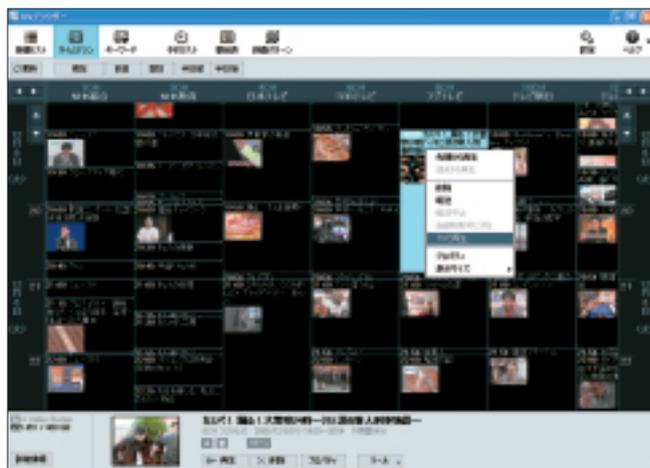


テレビに接続してリモコンからもひとつおりの操作は行えるが、Xビデオステーションはパソコンから操作することで真価を發揮する。

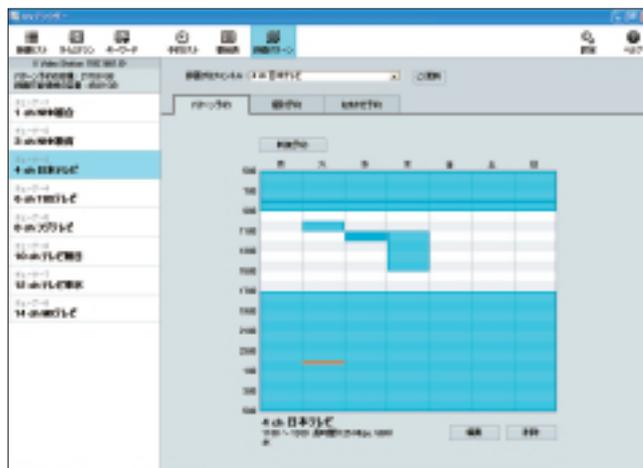
一般的なHDDレコーダーよりも若干大きめでシンプルな外観。正面には電源ボタン以外のスイッチ類は一切なく、VAIOのロゴもあるので見るとAVパソコンのようだ。



背面には外部入力端子(S-Videoとコンポジット)が2系統、S-Video出力端子、コンポジット出力端子、音声出力端子、アンテナ端子、LAN端子が用意されている。また、ファンも2基装備している。



録画番組を番組表形式で一覧できる「タイムマシン・ビュー」。過去に遡って見たい番組をクリックするだけで、すべてのチャンネル、すべての時間帯において再生が可能。



8つのチューナーのそれぞれにチャンネルを割り当て、録画パターンを設定できる。どれが特定の番組を指定すると言うよりも、ある日時の放送を丸ごと保存しておくイメージ。デフォルトでは、終日標準モードで録画する設定になっている。



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)